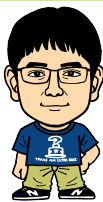


T.A ULTRAGUIZ CROSS REVIEW

史上最大の敗者復活戦 ～第11回 クロスレビュー

2015.11 執筆 2020.10 一部加筆

ねおかず



ウルトラファンサイト管理人
ウルトラの美術セット好き

コアタイム



テレビマンユニオンのウルトラ
クイズをこよなく愛す、ウルトラ
しまんちゅ

いけがわ



マンガ研究家。ウルトラクイズ
はストーリー性やバックボーン
を重視した視聴スタイル

なりすけ



総天然色ウルトラファンであり
Vtuberであり、ゲーム実況者
挑戦者のエピソードが好き

ウルトラクイズ 史上最大の敗者復活戦



1982年
12月31日放送

参加者
24642人

優勝賞品 視聴率
第7回グアムまでのシード権 約11%

史上最大！第7回 アメリカ横断ウルトラクイズ



1983年
10月20日/27日
11月3日/10日
放送

参加者
10203人

優勝賞品 視聴率
カナダ産ログハウス用の丸太 34.5%

史上最大！第8回 アメリカ横断ウルトラクイズ



1984年
10月11日/18日
25日/11月1日
放送

参加者
11408人

優勝賞品 視聴率
組み立て式クラシックカー 23.1%

史上最大！第9回 アメリカ横断ウルトラクイズ



1985年
10月24日/31日
11月7日/14日
放送

参加者
11754人

優勝賞品 視聴率
潜水艦（要酸素ボンベ） 22.2%

史上最大！第10回 アメリカ横断ウルトラクイズ



1986年
10月30日
11月6日/13日
/20日放送

参加者
17162人

優勝賞品 視聴率
熱気球（南米直行？） 26.8%

史上最大！第11回 アメリカ横断ウルトラクイズ



1987年
11月5日/12日
/19日/26日
放送

参加者
18017人

優勝賞品 視聴率
満潮になると沈む島 20.4%

当時ウルトラクイズがノリに乗っていた事を象徴する大会。「クイズを出前」し、日本の各地を訪れるコンセプトはその後の高校生クイズのプロトタイプとして多大なる影響を残した。第6回大会ロケ終了後から企画し実行したというのだから当時のスタッフの熱意に敬服する。オチもウルトラらしさがでてよい。第7回ウルトラのシード権を懸けた敗者の祭典。四国地区の〇×会場に分かれる第1問や、後楽園球場と大阪球場を同時中継で開催する等のアイデアが光る。チャンピオン胸賞しクイズの演出も好き。だが通常のUQ回とは違い、単発特番だと応援しなくなるような挑戦者が現れづらいかなとも思った。それでも短期間の準備でここまで創りあげたスタッフに敬意を表したい。

日本テレビが生放送のクイズ番組で紅白やレコード大賞に対抗した時代があった。高校生クイズのパイロット版、という歴史的な位置づけだけでなく、今回限りのユニークで意図的なクイズ形式も多数ある。結果的に〇×ジャンケン・ペーパーと勝ち抜いた優勝者なら、本大会グアムのシードも納得。

ウルトラ史上初、そして唯一の国内大会。敗者復活戦と言いつつ要は初参加もOKな応募自由のスタイルだろうと思って観ていたら、かつての挑戦者達が続々と集結して敗者復活感を盛り上げていた。後の高校生クイズに繋がって行く重要な大会だけに社会人を対象にしたこの大会もシリーズ化して欲しかった。

この大会は異質だ。その象徴が、早押しクイズ時、挑戦者は立ち状態且つ「テーブルの両脇を持った状態で問題を聞く」というものだ。結果としてボタン押しアクションが大きくなり、絵的に見栄えが増したが、その後採用されなかったのは、何かが足りなかったということだろう。

岩瀬さんが超元気！挑戦者の面々がイイ感じで揃った回。ロサンゼルスでの挑戦者登場シーンは皆晴れやかな表情が◎！クイズヨットスクール&罰ゲーム、セントRのジョギングマシンには爆笑。オルバーニーでの金時真代ちゃんとの別れ、そしてエンディングの留さんのナレーションに心打たれる名作。

「ヨットスクール」あたりからトメさんの地の部分が出始める。高視聴率回だがこの回だけのキノコボタン制以外特筆すべき点が乏しい。テレビがカジュアルに世界を映す時代、「HOWマッチ」も別時間帯でスタート。第8回以降はゴールデン昇格した「HOWマッチ」との戦い。

一般には留さんの顔がかぶれた等のアクシデントがある第6回が呪われた回と呼ばれ最高視聴率を出した第7回が最高傑作と言われているが、番組史上唯一のドクターストップ帰国者を出したこの回もなかなかとして危うかった気がする。賞品のログハウスは材木が余ったら輪切りにして番組に出てきた焼き印を押して販売して欲しい。

「大声」「マラソン」「海底早押し」等、クイズの産業革命が起こり、今後のウルトラの方向性が見えた大会。クイズのエンターテインメント性が増した一方で、学生の参加者が増え、福留氏の描きたい「人間ドラマ」が演出しにくくなってきた。その結果、大会はクイズ形式に寄った印象。

道篤氏 orz はさておき、グアムの敗者たらいまわしクイズに大声クイズ、ジョギングクイズ等、インパクトが強いクイズ形式が揃う。中でも海底早押しクイズ！スーツケースも海底！「自分の汗を蒸留して水を作る」「北北西に進路」等、名作罰ゲームも。古賀ママにはもっと先へ行って欲しかったなあ。

若者が多く、垢抜けた感のある第8回。大声・マラソンと第2期定番クイズが産まれたのも大きい。視聴者の度肝を抜く海底クイズの説明で「泳げないなんて非国民」「酸素？アラ要りますね」と石川アナ絶好調。トメさんも「ザ・ガマンはこの番組が生まれた番組です！」

バハマの海底早押しクイズは一発ネタだったのが惜しい程『風光明媚な場所で挑戦者を舞い上げらせつつクイズを行う』というウルトラクイズの本領を発揮している。最後のパンナムビル屋上決勝や改修の為にぐらぐらに囲まれた自由の女神等も見られない光景が次々と現れウルトラクイズの歴史やアメリカの歴史の資料的にも重要な回。

決勝を「パリ」に設定したため、これまでのウルトラの常識を打ち破る内容。結果として、「運」の比重が高まり、番狂わせがとてでも楽しい。チェックポイント数も多く、豪華爛漫。若い参加者が多いが個性的なメンツで人間味あふれる大会となっている。優勝者もその両親も超個性的。

NYを超えてパリ決勝！ロングルード紹介は何度見てもイイ！成田では第3次予選にヤラレタ。NYのマラソンもいいけど、ロンドンの迷路パラマキに当時心ときめいた。堀さんの潜水艦見たかったなあ。そして当時応援していたスーツ姿の伊澤さん！ドーバーが通せんぼだったらパリへ行けたかも！？

第9回は「運の回」。後楽園の敗者復活からドーバー横断まで、徹底した運要素にもかかわらず早押し問題も多い。良問が多く第9回の本は一般向けのクイズ大会で重宝する。バラエティー色も強く、2時間で5CP消化というベストな構成で楽しくよくまとまっている点を高評価。

決勝地がパリになりこの回から特殊なルートを盛り込むのが恒例になった。準決勝が一撃死の〇×クイズと言うのは賛否あるが、この番組が普通の「クイズが一番強い人を決める試合」ではなく「アメリカ横断ウルトラクイズ」という唯一無二の物であるという事を再確認させてくれるチェックポイントになっていた。

全てがカッコいい。コース終盤を秘密にし、南北2ルートに分けた驚きの展開。決勝の二人がNYで顔を合わせるシーンはクイズ番組の域を超え、ドラマも超え、ドキュメンタリーとして最高峰。挑戦者も個性溢れ、表情も美しく、クイズレベルも高い。これこそ歴代NO.1だろう。

巨大雲が晴れ二股ルートに！度肝。成田〇×機（贅沢！）、団体綱引き、念力、砂時計とアイデアも多彩。チチカカ湖の大道さん「成田でありかとうな」もグッと来る。決勝戦では巖流島の戦いを匂わせ、あえて森田さん後ろから登場させる演出が堪らない。第24回ギャラクシー賞特別賞。白井審査委員長、優秀の美を飾る。

第10回は「体力の回」。後楽園のぶらさがり復活、腕相撲、綱引き、マラソンからバラマキまで体力系クイズ3連発など、過酷な南米コースを見据えて選ばれる厳しい戦い。分岐の隠しルートが明かになったときの衝撃は忘れられない。ウルトラでは珍しい決勝の名勝負も良。

ルードが二手に分かれ、第9回を超える規模で特殊なルートでの戦いが繰り広げられた回。日高アナウンサーが担当した南米ルードチャンピオンが留さん担当の北米ルードチャンピオンに勝ったという展開は日高アナがウルトラクイズの次期進行役になるという未来を強く感じさせてくれた。が、実現しなかったのが残念。

国内予選がこれまでにないくらいに手間暇をかけており、「新たなウルトラ」をやりたいというスタッフ側の思いが伝わる。本土上陸後のクイズも新機軸のものが多く。やや地味な印象が拭えないのは、前大会があまりにも素晴らしかったためだろうか。若い挑戦者が多い事も要因か。

この回で敗者の味方の役目を終える徳光さん。名古屋ミニトラは置き土産？COM予想泣かせの温井さん、打倒西武！宇田川さんの罰ゲーム、謎の男・ミスターXの演出や松尾さんの登場シーンが好きだった。優勝賞品のオチはウルトラ歴代NO.1。パチンコ島が今も稲川さんの所有物だそうで素敵です。

準決勝の伏線となる後楽園のエキシビジョン、クイズ神社や「徳光さん引退興業」の名古屋ミニトラなど第一週の仕掛けが楽しい。定番クイズを前倒しして後半に意欲的な形式を持つてくる大胆な構成。また全体的にインパクトのある「絵」が多く、とても印象に残る回だ。

前回に続きルードの一部が隠されていた回。一足飛びルードは第10回のきっぱり二手に別れたルードと比較すると規模が小さくなった印象。しかしもう一つの特典ルードとも言うべき名古屋縦断ミニトラクイズは一つのコーナーである敗者復活戦としては圧巻の規模で繰り広げられ史上最大の看板の面目を躍如していた。